

僧風教育について

浜 島 典 彦
(立正大学熊谷学寮 寮監)

はじめに

先ほど宗教教誨の現状について話されました秋永先生は信行道場のほうで訓育をされ、また、今日お見えの先輩の方々の中にはいろいろな場で僧風教育の訓育をされてきた方ばかりです。そういう方々の前で私が僧風教育などという話をお話するのは主客転倒だと思つたのですが、きょうはご助言をいただくつもりでやってきましたので、よろしくお願い申し上げます。

今、私は研究テーマとしまして、「布教の歴史」ということをやっております。特にその中でも明治期ということに重きを置いております。今日秋永先生が話されました教誨事業の草創期についても研究しております。

そのルーツをたどってみますと、明治五年に教導職制というのが敷かれます。教導職と申しますのは、明治政府が神道国教化を標榜したわけですが、それは失敗するわけです。それに対して、教部省という仏教と神道所管行政府を設けて、教導職制というのを敷くわけです。その教導職制が明治十七年まで続きます。

特に仏教界に対しては圧政の時期でございます。住職になるにも、あるいは説教をするにも、いろいろなことをするにも、この教導職にならなければできないという時代でした。唱題行脚をしてはいけないというおふれが日蓮宗を名指しで出るのもこの時です。

教導職制に呼応したのが教誨事業開始の端緒であります。それも最初は真宗系、特に大谷派と本願寺派がその主導権を握っていくのです。例えば、明治十一年の記録によりますと、教誨事業の半数以上が真宗一派あるいはいろいろな派のグループが、全教誨事業の過半数を占めています。日蓮宗がただ一つ介在したのは、千葉刑務所だけなのです。新居日薩和上が日蓮宗における教誨の開祖と言ってもいいと思いますが、思想、信仰面で国家統制をする中で、教導職制が生まれ、それに呼応して出てきたのが教誨事業ということですが、最初はそういうことで始まり、その中で真宗が大きな力を持っていくわけです。

『教誨百年史』というのが編纂されていました。それを見ると残念ながら、ほとんど真宗のことしか書いてない。私は非常に残念に思っています、「当時日蓮宗は何をやっていたんだ」と思う一念で、その他のことをいろいろ調べましたら、明らかに日蓮宗はその時点で真宗あるいは曹洞宗におくれをとってたわけです。それが今、既成教団の中でナンバー5というレッテルを張られたのも、その時点からの歴史だと、私は考えるのです。

したがって、明治期の歴史を検証することで、将来二十一世紀に向かって何か役に立つことがあるのではないかと。あるいは、それを超克する何かが必要なのではないかと、私は思うのです。

ところで、私は今、熊谷学寮の寮監という仕事をやっております。寮監になって四年目です。二十一世紀に日蓮宗が伝道教団たり得るとするならば、一つは研究機関、もう一つは法器養成、この二点に重きを置けば、二十一世紀の日蓮宗は安泰であると言っても過言ではないと信じております。

例えば、保谷レンズが大きくなったのは研究所に力を入れ、人材を養成したからです。IBMは一人のエリートを育てるために一億円をかけるといえます。このような支援があつてこそ、その会社は伸びていきます。したがって、日蓮宗も本当に伝道教団たり得るならば、研究機関、法器養成の場面にもっと力を入れればと、私は常日頃思っています。

レジュメに示しましたように、大きく三つに分けてあります。第一は、日蓮宗における僧風教育の歴史であります。第二に、その歴史を点検することによって、現状の僧風教育機関がどういふものであるかということを直視し、第三に、問題点を挙げて、その解決の方策あるいは将来の展望を考えて行きます。

一、日蓮宗における僧風教育の歴史

① 近世における僧風教育

さて、近世における僧風教育は、もともと本山を中心に談所が設けられ、それが檀林になっていきます。関東では中村とか、飯高、小西という「関東八檀林」、あるいは関西では松ヶ崎、鷹ヶ峯という「関西六檀林」が形成されていきます。そういう中であって、注目しなければいけないのは、私的に僧風教育に当たられた方の存在です。深草の元政上人、そして日臨上人、それから、幕末に出られた日輝和上ということになります。今日は時間がありませんので、そのことについて触れませんが、今、日蓮宗の宗定法要式のものになったのは、元政上人、臨師、あるいは優陀那日輝和上であります。特に優陀那日輝和上の充治園で形成された儀軌がもとになっているわけです。

しかし、幕末に、充治園だけのものになっていたのを、誰が発掘したかといえば、新居日薩和上でございます。新居日薩和上の存在がなかったならば、今の日蓮宗宗定の法要式の存在はなかったと思います。さきごろ『大教院版要品』が出ましたが、これも薩師の力です。新居日薩和上はいろいろな批評がありますが、僧風教育を支援する体制を、現代にも生きる試みをされた方として、私は高い評価をすべき人物ではないかと思うのです。

檀林が明治の文明開化とともに衰退していきます。明治に入りまして廃仏毀釈運動が起きてきます。政府は神道国教化を目指します。しかし神道国教化が挫折した原因の一つに、僧侶の意識、つまり檀林で培われた信仰意欲、そして、教学に対する熱烈な勉学意欲があったからではないかと思うのです。

と申しますのは、明治五年に出されました「布教上の諸注意九項目」には、次のようなことが書いてあります。つまり、神官の説教はだめだ。神官は五座も六座もするな、ほどほどにして二座か三座ぐらいにしなさい、おまえたちは不勉強だから。人を説得するような力がない。教義に対しても理解していない。――裏を読めば、仏教側はすばらしいということになります。

檀林で培った信仰、勉強意欲、僧風教育が明治の廃仏毀釈の嵐、あるいは神道国教化の出鼻をくじいたと思うのです。ですから、僧風教育がしっかりしておれば、時代に対応できるのではないのでしょうか。

② 明治期における僧風教育

明治期における僧風教育には、大教院を頂点とする教院制度、沙弥校、交番学校等、それら私的な機関として茗荷学園がありました。教院制度は、大教院というものを頂点にして整備された制度で、神道国教化政策の中で仏教側が随順する形で構築されたものです。『日蓮宗事典』の表現は、政府が一方的に設けたように受けとれますが、そうではなく、教導職を養成するために、実は仏教側から「神仏合併大教院」というのをつくってはどうかと申し出たわけです。神道の教義を取り入れて、教義を説きなさいという官命が下るのですが、当然のことながら、仏教側は神道の教義を知りません。そこで、神道と仏教と一緒にって勉強していこうではないかというわけで、「神仏合併大教院」ができるわけです。

明治八年には解散するのですが、この解散を促進させたのは日蓮宗ではありません。残念ながら真宗です。真宗に島地黙雷という怪僧がおりまして、わざわざロンドンから三条教則反対の建白書を送り、帰国後神仏合併大教院反対の運動を起こします。真宗が反対し神道内での抗争もあり、神仏合併大教院は解体ということになっていくわけです。

明治八年の神仏合併大教院解散後、日蓮宗の大教院ができるわけです。今の宗教と、学問の府が分かれていきます。今の日蓮宗宗務院・立正大学の前身ができるのです。

明治八年以降、薩師は大教院を頂点とした、中教院、小教院そして宗学所を設けて教育制度の整備に力を注ぎます。明治十二年の届け出によりますと、教院制度の施設が全国で六十四カ所となっております。大教院を中心にして宗学の研鑽、あるいは僧風教育が行われていたということ です。

また、薩師が考えたことは、坊さんだけでは財力には限界がある。信徒の再編成に期待をかけたのです。再編成をいかにするか、それは、江戸中期から出開帳、居開帳ということが行われています。その中で、講中結社の財政基盤は膨大なものです。これを見事に吸収し、再編成をしてみたのは真宗です。北海道布教で、なぜあんなに真宗が成功したかという、財力と信仰心があったからです。

真宗が次男坊、三男坊を連れて北海道の開拓に行くわけです。表面上は開拓という形ですが、実は真宗にしてみれば、新しく寺をつくる目的なのです。既成の事実をつくっておいて、寺をつくったから認めろというやり方をするわけです。そういうものには講中結社の財政基盤を真宗は見事に集めたわけです。また、島地黙雷は伊藤博文と山県有朋と朋友ですから、政治的バックを基として北海道布教を伸展させていったわけです。

そのころ日蓮宗は一体何をやっていたのでしょうか。一致派とか勝劣派とか論争していたのですが、そういう中で、新しい制度を試みます。それは旧来の講社に妙法講という名を冠する。それ以外に第一清浄結社、第二清浄結社という講中を設けていきます。それが第十番目までできていきます。東京を始め大阪、京都、長野、長崎にできていく。そして財政的な基盤を求め、そこへ大教院あるいは中教院の院生を派遣して布教させたわけです。大教院、中教院、小教院でしっかりと宗学の研鑽をし、あるいは僧風教育を受けて、布教の場を与える、そういう機関をつくったわけです。

ところが、明治十七年の教導職の廃止に伴って、大檀林あるいは檀林、宗学林というふうに変称されていくわけですが、その後間もなく日蓮宗の教院制度はなくなっています。しかしながら、他宗の教院制度は残っています。私

は冗談で言うのですが、甲子園の高校野球に出ていない既成教団は何宗かといえば、日蓮宗です。ほかは全部出ています。それは一体何かというと、地の宗団は教院制度が後に高校になり、大学になって残っていったのです。教育の方面で一般社会に浸透していった教院制度であつたわけです。ところが、日蓮宗は残念ながら挫折を迎えてしまいました。本当に残念な出来事であつたと思います。

今やればいいなと思う制度が、ほかにもたくさんありました。例えば、沙弥校ですが、これは明治十一年に設立されたもので、十三年には沙弥校規則三十六条ができております。薩師が校長になりますが、池上の永寿院で初めて開校されております。対象年齢は十歳から十四歳です。今の沙弥校一週間という短期間ではなく、当時は六ヶ月です。一期が六ヶ月で、定員は三十名です。何期やるかというところ、六級、五級、四級、三級、二級、一級と六期までやります。つまり、三年間という長きにわたつての沙弥校教育をするわけです。当時の教師としては、小泉日慈師とか、及川真能師が当たつたようですが、そういう中から有為な人が輩出しているわけです。

もう一つは交番学校というのがあります。何か駐在さんがいるような名前ですが、フルネームを「交番生徒学校」といいます。『明教新誌』の第三五七号に五章四十九条からなる長い規則が載つております。それを見ますと、短期間の宗学の間として、三十歳未満の者は必修の僧風教育の場合です。三十歳以上の場合も、志願者は入校してもいいということになっていきます。明治八年に東京で池上本門寺と深川の浄心寺で開かれます。大阪では十一年三月四日に始まつております。これは全国の中教院が整備されるまでずっと続けられております。三十歳未満の青年教師は必ずこの交番学校に入つたのです。そして、交番学校廃止後、中教院に入院の義務が課せられ、明治の初期の僧風教育の体制が確立されていったのです。

そのほかに、重要な機関として茗荷学園というのがありました。これは堀之内の妙法寺の第二十九世武見日恕という人が、財団法人の日宗十萬団結報恩会の事業として始めたものです。小石川の茗荷谷という地下鉄の駅があります

が、その近くに茗谷学園を明治三十六年九月二十日に開園しております。敷地が三百坪あったといえます。規則には「日蓮宗門下の法器たらんとする目的をもって、世間諸学校に通字する者のための寄宿舎」「特に自主性を重んじ、自治を行う」ということが書かれています。初代園長は山田日真師でした。

東京に在住する日蓮宗の修徒であれば立正大学、あるいは駒沢大学へ行っている者、あるいは井上円了の哲学館へ行っている者が茗谷学園へ入って、朝はきちんとお勤めをし、宗学の講義を受け、それぞれの大学へ行ったのです。この中から石橋湛山先生、あるいは守屋貫教先生、網脇龍妙上人など、大正から昭和にかけて日蓮宗を護持していった各界の重鎮が、この宿舎から輩出されたのであります。

さらに明治末期から、大正、そして昭和の初期にかけて、数多くの大学で法華経、日蓮聖人の研究グループが存在しました。茗谷学園と関係があると思いますが、まだ検証はしておりませんが、東大、一高では澗治会、早稲田には日蓮聖人讃仰会、東洋大学には橘香会、一橋大学——当時は東京商船学校と言いましたが、そういう各大学に、今で言う第三文明でしょうか、法華経研鑽あるいは日蓮聖人の讃仰会のグループがあったというのです。そういう中から日蓮聖人を慕い、文学者になったり、あるいは財界人が輩出したというのです。

そういうことを考えますと、明治期の熱情にあふれる僧風教育のシステム、教院制度、その他の制度、茗谷学園のようなものが、なぜ継続されなかったのが、私は残念で仕方がありません。

二、現今の僧風教育

そこで、現今の僧風教育機関というものを見詰め直してみます。

こういう言葉を使っているいかどうかわかりませんが、「必修」と「選択」ということで分けてみました。

信行道場のみが必修です。教師になるため、もちろん検定を受けます。あるいは立正大学を通過して、僧階単位を

二単位取得すれば、入場可となります。三十五日間です。

選択のほうは、僧風林が一週間。

宗立学寮、これは私どもが預かっているところですが、谷中学寮は宗祖生誕七五十年、熊谷学寮は七百遠忌のときにできたもので四年間です。

布教研修所は六ヵ月間です。大変長いと思われるかも知れませんが、明治・大正のことを思えば非常に短い。しかしながら、一時二年連続で四人か三人という事態になったものですから、ある宗会議員の方が宗会で、お金がかかるからやめてしまえということを言われました。私はそのときに宗門は地に落ちたと実感したのです。お金がかかるからやめてしまえなどということは、どういうことなんでしょうか。前述しましたように、一人の人材を会社が育てるために一億円の巨費を投じるわけです。そのくらいの巨費をかけなければ有為な人材を育てることができない。年間一千万円の予算です。確かに日蓮宗にとっては莫大なお金だと思えますが、ほとんど講師費で流れていきます。私は、研修所は発展的解消であつたら認めます。しかしながら、少なくとも人が少ないから、お金がかかるから廃止するなんていう議論はしてほしくありません。特に宗会で私たちが選んだ代表の方がそういうことを言うのは、とんでもないと、若者に夢を与えてくれなければと非常に残念でした。

布教院、これは明治年間に始まったものです。初代の院長が近代の名説教家旭日苗下です。当時は期間がもう少し長かったのですが、今は十五日間です。当時、本圀寺に常設されていました。今、隔年で本圀寺ということですが、特に日蓮宗伝統の繰り弁、高座を中心として行われております。

加行所は、周知のように百日間です。

近年になり、日蓮宗声明師養成講習会が一週間行われています。

以上が公的な機関ですが、私的な機関としては、石川泰道先生が、現代における言説の研究・実践をやっておられ

ます。

ほかに、かつての檀林であった立正大学、身延山短期大学・身延山高校で、僧風教育が行われました。しかし、今の仏教学部で僧風教育ができるかと問うても、「否」と答えざるを得ません。何か行をする場がなければいけないと思うのです。信行道場は望月日謙師の時代、昭和十二年にできました。大学が檀林としての役目を果たさなくなったからこそ、信行道場ができたのです。本来であるならば立正大学の仏教学部あるいは身延山短期大学、身延山高校でそういう務めを果たす場があればいいなと思うのですが、今では、立正大学も総合大学、仏教学部は学問の府になり、僧風教育の実務は不可能に近いのです。

三、僧風教育の問題点

現状を見てきましたが、それでは、一体どういう問題点があるか。次の八項目を挙げたいと思います。

① 具体的な教育方針の不徹底

それぞれの機関の位置づけがなく、具体的な教育方針の不徹底ということがあります。前項で挙げた「選択」の中に入る僧風教育機関の位置づけがどういうふうになされているのか。例えば、私が関与する宗立学寮が僧風教育の体系にあって一体どういう位置づけにあるのか、まだ明確にはされておられません。

そして、教育方針の不徹底といえますのは、釈尊が僧風教育をどういうふうになされたのか、あるいは宗祖はどうであったのか、先ず歴史的な理念から教育方針が出てこないといけないと思います。また、本化教学を基とした教育理念は一体どういうふうにあるべきか。それ等を咀嚼して、各々前掲の選択の場で教えていかなければいけないのです。それも終始一貫した方針がなければ、僧風教育は完全ではないのです。

② 生涯教育の体制・長期教育の場の欠如

会社員、国家公務員になりますと、例えば警察官は試験で昇進するわけです。一流会社では、何も勉強せずにいれば、自分の首を締めるのと同じで、給料も上がりません。会社に入れば必死になって勉強するのです。新しい機械が導入されると、五十歳のおじさんがワープロの勉強をしたり、コンピューターの操作の勉強をしたりということが強要されるのです。それに比して、私はどうかというと、生涯教育がなされているかを問うと、されていないのが現状です。「必修」のところ、ただ三十五日間いれば——今、読経試験に合格しない者は少し期間が長いのですが、ただ、トコロテン式にスツと押し出されれば、ボンと「教師」という料理ができる。聖職者として、一応社会的評価を受けている集団なので、三十五日間でインスタントにできた僧侶がどうして社会をリードしていけるのか。対応する能力があるのかどうか、本当に真剣に考えなければいけないと思います。

③ 世襲制の弊害（歴史的には明治五年四月二十五日、太政官布告一三三号より派生）

私も世襲制の産物でございます、私は桑名・寿量寺の浜島という血脈から言えば三代目に当たります。今、お寺で住職をやっておられる方は、たぶん三代目、あるいは四代目という方が多いと思います。

歴史的には明治五年四月二十五日の太政官布告一三三号、これは「肉食妻帯勝手たるべし」、そして附帯条項として、ふだんは法服を着なくていいというものなのです。明治政府にどういう意図があったかと申しますと、僧侶の低俗化をねらったわけです。つまり、今まであがめ奉られた者が妻帯することによって戒を破るという行為を歴史的に明言したのであります。

それ以前にも勿論妻帯した方がいると思いますが、日蓮宗の今の男性教師は九九％は妻帯されています。そのお子さんの世襲の確率が大体七割から八割です。二割から三割が在家の出身の方です。

それでは、世襲は弊害かと申しますと、芸能人で二代目、三代目ですばらしい方もいらっしゃいます。その他政界でも、あるいは財界でもすばらしい方がいらっしゃいます。しかしながら、宗教界に限りて弊害が多いのではなから

うかということなのです。

しかし宗教界にもすばらしい血脈がありました。鎌倉時代、澄憲、聖覚という人物がいました。親子です。澄憲は天台宗の有名な僧で京都の安居院に住み、真宗の節談説教のルーツをつくった人です。澄憲は貴族の出身で、半俗半僧、奥さんは何人いたかわからないのですが、十二人の子供をつくります。女の子が一人、聖覚は三番目か四番目の子ですが、十一人の息子さん全部を、節操がないと思うのですが、浄土真宗にやったり、あるいは真言宗にやったり、いろいろな宗派にやっているのです。

聖覚はお祖師様よりちょっと前の年代の人で、日蓮聖人の御遺文に二カ所出てきます。真宗教団の布教の発展に寄与した人なのです。浄土真宗の布教の系譜の中で、法然、聖覚、親鸞と称される人でもあります。澄憲が始祖ですが、安居院流の話芸を大成した人で、何をしたのかというと、和讃が主なんです。和讃を利用していろいろな説法をしたのです。聖覚は『唯信鈔』という書物を書いています。それを親鸞は読み、自ら『唯信鈔文意』をあらわしております。そして、弟子たちに向かひまして、聖覚の『唯信鈔』を読めと勧奨しているのです。

澄憲とか、聖覚とか、真宗教団の発展に良い影響を及ぼすような世襲制が行われていけばいいのです。しかし、弊害も多いということです。私もそうであったのですが、寺族を守るために自分の子に継がせる。また、女の子が生まれたら、寺族を守っていくために養子を取らなければならない。そうなれば一体寺のためのか、あるいは寺族のためなのか、宗門のためなのか、信仰のためなのか、私は宗団として明確に取扱っていかなければ、二十一世紀の伝道教団としての日蓮宗は成り立たない問題だと思います。

私も男の子が二人おりますが、果たしてこの子は坊さんになれるのかどうかと判断した上で出家させなければいけない。やはり師匠たる者は、そういう思いでいなければいけないのだと、私はこのごろ学生を見ているとそう思います。具体的な弊害については、⑦に関係したことで、後述させて頂きます。

④ ブランドへの志向

ブランドと申しますのは、クリスチャン・ディオールとかというブランド商品ではありません。私は修法師ですが、修法師とか声明師、あるいは専任布教師をブランドと表現したのです。ブランドを若者は非常に欲しがります。今年研修生は入所志願者が十七人になったそうです。去年は確か入所者が九人で、それ以前は三人、四人でした。なぜこんなにふえたのか。原因は声明講習会第一回修了となること。専任布教師になれるから。つまりブランドを獲得できるから、入所する者が急にふえてきたのではないかと思うと残念な気持ちもします。しかし、彼らが「いや、そうじゃない。私はそういうことではなしに入所したんだ」と言ってくれるのを期待しております。今の若者はブランド志向に、特に修法師としてのブランドを欲しがっております。寮にいますと、「先生、祈禱肝文を教えてください。水行はどうしたらいいのか」と言いますから、「どうするんだ」「大学を出て加行所へ行くのです。そうでないと、うちは食っていけないですから」ということを言います。それはそれでいいと思います。しかしながら、「食のためのものなのか、自分を鍛えるためのものなのかを考えなければいけない」ということを学生諸君には話すのです。

⑤ 僧階単位の見直し

機構的な問題ですけれども、僧階単位の見直しがぜひ必要だと思えます。立正大学仏教学部のカリキュラムの中で僧階講座というのがあります。そのほとんどは仏教学・宗学・宗史です。それ以外のものとして、現代布教研究、あるいは布教研究及び法式実習ということになります。この中に教化学あるいは伝道学はありません。龍谷大学、大谷大学あるいは駒沢大学、特に真宗系では伝道学という分野が確立されています。駒沢大学では、教化研修所から『教化研修』という分厚い本が毎年出ています。三十年以上の歴史を有しているのです。日蓮宗では教学研究発表が行われていますが、駒沢大学ではもう一方で教化研究発表が行われています。脳死の問題、あるいは差別戒名の問題と、あらゆる問題を取扱っております。伝道学・教化学がない僧階単位がこのままであっていいのかという危惧に駆られ

ています。伝道教団日蓮宗に僧階単位の見直しということは、ぜひ必要ではないかと思っております。

⑥ アフターケア（研修所修了生・在家出身者等）

今、研修所の修了生は何をやるか、具体的には宗門的な機構内では信行道場の訓育に当たるか、あるいは研修所に残るか、海外布教に出かけるか、そのようなことではかあり得ない。

ある人が、自ら言っているのですが、研修所の主任三木上人に触れていいほうに変わり、菩提心を発心して、今では伊豆のほうで非常に頑張っている人が存在します。実力のある人はともかく、宗門の機構内で修了後を生かしていく方がまるっきりないのです。私が書記をしているときに、ある宗門の責任者に「研修所を修了した人にアフターケアとして何とか生かす機関がないものでしょうか」と。そうすると、その方はこういうことを言いました。「それは自分で見つけるんだ。宗門としては今そんなことができるわけがない」と、はっきり言われました。非常に寂しい想いをしました。

三多摩地区には一カ寺もないといえます。そういうところに研修所の修了生を收容して、実験的な布教の場、布教所をなせつくりたくないのかと思います。あるいは小笠原の寺が今度日蓮宗にはっきりと帰属したそうですが、そういうところで青少年の修養道場の常設を行い、修了生を常駐させるような方策が考えられると思います。研修所修了生のアフターケアをぜひやっていただきたいと思うのです。

私は寺族出身ですが、今まで百人以上の学寮生を見てきまして、情念に燃え、道心に燃えているのは、寺族の出身よりも在家出身の子たちが多いようです。彼らには意欲もあります。また、寺族でも、教会・結社出身の者は何かを吸収しようとして本当に一所懸命です。しかし、お師匠さんがすばらしければ良いのですが、あの人に任せていいのかなというお師匠さんがいるのも事実です。そのような師匠に任せたままで、この子が一体これから伸びていくのであろうか、本当に自分の布教活動ができるのであろうかということを考えると、宗門でバックアップしてやらないと

いけないのではないかと考えざるを得ないので。今、寮生を預かっておりまして、本当に意欲がある子は一割か一割五分です。その半分は在家の子です。彼らは全てに一所懸命に取り組んでいます。

寮にいる子は悪い子ばかりいるかと思われるかもしれませんが、そうでは決してないのです。当たり前のことなんです。本来ですと十八歳、大学に入ってくるまでに、お師匠さんなりあるいはお父さんがしっかりと自分の弟子あるいは自分の子を教育して、「ハイ、お預けします」というのなら私もやりやすいのですが、お経にしても方便、自我から「一文文」でやり直しをしなければいけない。極端なことを言いますと、草取りの仕方から教えなければいけない。箒の持ち方から教えなければいけないのです。仏具の取扱ひ方、仏具の由来、経卓というものはどういふものであるか、あるいは法華経を我々ほどのように読み、理解し、頂戴したらいいのかということも、私がまた教えなければいけないのです。一体何に欠陥があるのでしょうか。十八歳までの教育に欠陥があるものと思うのです。

⑦ 新人類気質・過保護・マイホーム型（得度はすれど発菩提心はなし）

新人類気質を理解するのは非常に難しいものです。朝六時から掃除が始まります。今朝もどなったんですが、「きょうは雨が降るからガラスふきをしておきなさい」と言いますと、丁寧にやります。私が点検のとき、棧を見ますと真っ黒です。

「棧をふいてないじゃないか」

と言うと、その子は、

「棧をふけとは言われませんでした」

と言います。

つまり、言われたことはきっちりやりますが、それ以外のことはなかなかできない。心配りができないのです。

しかしながら、新人類諸君は物おじしなないから、いいところもあります。そういうところを伸ばさなければとも思

います。

昔は五人、六人という子がありましたから、親の目が届かなかった。今は一人、二人で、それも何とかこの子にお寺を継いでもらいたいという一心ですから、どうしても過保護になってしまいます。

これは実際にあつたことですが、「布団の上げおろしをするんですか」と言つた子がいます。つまり、自分は今までベッドを使つていて、お母さんが毎朝シーツを変えてくれる。自分で布団を扱つたことがない。どういふふうに敷いて、どういふふうにシーツをかけ、毛布をかけていいかわからないという子がいました。

ある大きな寺の息子は、車を買つてやるとか、あるいは海外旅行をさせてやるから、何とか二年間寮にいてくれと。これではあまりにも情けない話です。得度はすれど発菩提心なしです。本来ならば、発菩提心があつて得度をするというのがルートだろうと思いますが、そうではなく、得度をして発心があれば本当に「良し」としなければならぬ状況なのです。

⑧ 宗団護持のためではなく社会に寄与する宗教者の養成

今の日蓮宗教師、特に若い人には教学への勉強意欲がありません。私は数年間、全国日蓮宗青年会の執行部のひとりとして行学道場というのを始めました。京都で茂田井先生に『開目抄』を講義していただきました。とにかく『開目抄』を読破しようということで、一泊二日でやったわけです。最後の講義が終わったときに一部の人が「万歳」と手をあげました。後で聞くと何人かが、「私は初めて『開目抄』を読んだ」と言つのです。「あなたは今迄一体だれの弟子だったのですか。親鸞聖人の弟子ですか」と私は問いたかつたのですが、それをグット抑えて、何とか『開目抄ノート』あるいは『本尊抄ノート』を出して啓蒙していかねばいけないと実感したのです。今、若い人には教学への意欲があまりありません。教学の話をしてても煙たがられる現状です。

教学を大事にし、日蓮宗という宗団護持のためではなく、社会に寄与する宗教者を育てる僧風教育でなければいけ

ないと思います。宗門護持だけの目的の教育ではいけないと思うのです。そのような状況をお祖師さんは決して望んでおられないのです。

情けないことばかり話しましたが、明るい兆もあります。今の新人類気質には、実際に現場を見せると非常に感動いたします。今やっていることは、一つにはハンセン病の収容施設、草津の楽泉園——これは（前寮監の）小野先生が駐在布教されていますが、そこへ時々学寮生を連れて慰問にいきます。私が初めて行ったとき、法話を終え、丁度お昼どきで、「お昼を食べてください」とおにぎりが出てきましたが、出された手を見て、半分ぐらい欠けているものですから、遠慮したことがあります。綱脇龍妙上人に会わせる顔がないほど失礼なことをしました。

ハンセン病の方は後遺症で目が悪いのです。草津は階段がいっぱいありますので、めがねをかけて、おじいさん、おばあさんが夫婦でトコトコ、大丈夫か大丈夫かというふうにおりて行かれる。あらかじめそのご老人の境遇を予備知識として教えておきますと、そういう場面を見ますと、学寮生は涙するのです。その他、交通遺児と交流をしております。募金を手伝ったり、ハイキングしたりしております。

そういう中であって、私も彼らにはいろいろと教えられる立場にあります。毎日、こう言ってよかったのか、こうしていいのかと反省の日々であります。朝も六時過ぎから夜も十二時過ぎまで、いろいろと相談を受けます。

そういう時にいつも、「僧風教育において、君たちが置かれている立場というのは、僧風というのだから、法華経の精神・宗祖の精神に基づいて行動しなければいけない」ということを訴えているつもりです。

特に先ほど言いましたように、研究機関と法器養成の場面をしっかりと行っていれば、日蓮宗は再成の気運が見えてくると思います。

そういう思いでございますので、今日はご助言を頂ければと思います。（拍手）

※本稿は、平成元年五月十一日に宗務院にて行われた第十三回教化学研究集会における発表をまとめたものです。